

ぼくはハーバス

①

ぼくはハーバス

山県市を走っているバスなんだ。

小型だから細い道も走れるし、

お年寄りや、足の不自由な人にも乗りやすいように
床も低くしてある。

窓は大きくて外の景色がよく見える。

今日は、みんなにハーバスのことを知ってもらいたいんだ。

じゃあ、一緒に出かけるよ。しゅっぱーつ！！！！

②

山県市の一番奥には、

神崎という、山と川がとってもきれいなところがあるんだ。

春は桜の花が満開になり、

風が吹くと、桃色の花びらが空を舞うんだ。

③

夏には谷川の水がキラキラ光って、
その中を魚がスーイと泳いでいる。

④

秋にはもみじや銀杏の木が赤や黄色に色づいて、
猿や鹿も出てくるんだ。

⑤

冬はあたり一面ふわふわの雪。

雪合戦をしている子どもたちが楽しそう。

⑥

谷底を横目に、細い道を運転手さんは上手に走る。

それはもう、スリル満点。

ダンプカーのお兄さんが、

すれ違える場所でぼくが通るのを待っていてくれる。

ぼくは、毎朝、いわ桜小学校に通う小学生が

乗ってくるのが楽しみなんだ。

⑦

お姉ちゃんと一緒の健太くんは元気いっぱいの小学2年生。

7..39

健太・姉

「おはようございます」

二人はお母さんに見送られて、元気なあいさつでバスに乗ってきた。

運転手

「あくおはよう。今日も元気だね」

運転手さんがミラー越しに笑顔で答える。

次のバス停でみほちゃんとあきらくんが乗ってきた。

みほ・あきら

「おはようございます」

谷川が見えるカーブにさしかかると、健太くんが言い出した。

健太 「あそこの川にカッパが住んどるんやと。」

姉 「そんなこと誰が言ったの？」

突然の話にお姉ちゃんは驚いた。

健太 「先生が本、読んでくれたんやて。」

姉 「カッパなんかおらへんわ」

お姉ちゃんは強く言う（また適当なこと言って・・・）と心の中で思った。

健太 「おるんやて！厚谷におるんやて！先生、言ったもん」

あきら 「あ！知つとる。コテージのそばの厚谷やよね」

あきらくんの言葉に健太くんの顔が輝いた。

姉 「え〜ホントの話やったの〜」お姉ちゃんは口をすぼめた。

健太 「ホントやって言つとるやん。」

釣りに来た人がその谷で魚を釣つとつたら、カッパに引っぱり込まれて、それから誰も、その谷には近づかんようになったんやと

みんな 「へえ〜そんな話があったんや」

みんなはそう言うと、バスの窓から谷川をのぞき込んだ。

登利のバス停に到着すると、みんなは「ありがとう」といって降りていった。

バス 「あの川にはそんな昔話があったのか〜」

ハーバスもはじめての話に驚きながら、健太くんたちの後ろ姿を見送った。

次は大桑のおばあちゃんたちを病院や買い物に連れて行くんだ。

最初のお客さんは、斧田のバス停で乗ってきた。

武山さんというこのおばあちゃんは90歳。

いつも、高富の医者へ通うついでに買い物をして帰る。

斧田のバス停から先は次々とお客さんが乗り、

向き合って座れるハーバスの中はお客さんでいっぱいになった。

武山さん 「今日はお医者さんは混んどるかな？」

武山さんが、隣のおじいさんに声をかける。

おじいさん 「最近風邪も流行つとるし、患者さんが多いでね」

おじいさんが答えると、今度は隣の宇野さんが

宇野さん 「医者で時間がかかると、買い物する時間がなくなるからね」と話に加わった。

武山さんは、息子さんたちの隣の家で、ひとり暮らしをしている。

武山さん 「お嫁さんが食べるものを買ってきてくれるけど、足りんものを買いたいでね」

宇野さん 「武山さんは本当にすごいわね」

宇野さんは、年をとってもひとり暮らしをしている武山さんに感心した。

おしゃべりが弾む中、
バスは幸報苑という施設の前に停まった。

車いすに乗ったおじさんが、
玄関で施設の人と一緒に待っていた。

運転手さんが座席を上げ、スロープを出して、
車いすごとバスに乗せる。

おじさんはハーバスに乗るのが今日はじめてなんだって。

帰りのバスの時間を、運転手さんに何度も聞いていた。

おじさんはスーパーで買い物するからと、

警察署前のバス停で、運転手さんに降ろしてもらった。

ぼくは車いすの人も乗れる、

おしゃべりで賑やかなバスの中がとてもうれしかった。

岐北病院前のバス停に着くと、

お客さんはみんな降りて誰もいなくなった。

夕方の伊自良湖口行き

16・36

岐北病院前から、高校生3人とおじいさんとおばさんが乗ってきた。

高校生は並んで座り、学校の出来事を話している。

あゆみが

あゆみ 「ねえ、文化祭いつ？」

萌と愛に聞いてきた。

萌・愛 「うちは9月26、27日だよね」

同じ高校に通う萌と愛は一緒に答えた。

あゆみ 「クラスの出し物とかあるの？」

あゆみがまた聞く

今度は萌が

萌 「うちのクラスはメイド喫茶をやるんだよ。

『ご主人様、何になさいます』って」

あゆみ・愛 「えっく!!! あんたあの格好するのく???」

3人は学校の話で盛り上がっている。

そんな賑やかなバスの一番前に座っていたおばさんが
運転手さんに話しかけてきた。

おばさん

「私はよそから引っ越してきたんだけど、山口市はいいわね。

若い子もお年寄りも使えるバスがあつて。

でも、バス停までが遠いお年寄りもいるし、

本数が少なくて、帰りたい時間に帰れないこともあるから、

もう少し使いやすいバスになるといいわね」

すると運転手さんが

運転手

「お客さんでいっぱいバスもありますが、誰も乗っていないバスもありますからね」

と答える。

おばさんは話を続けた。

おばさん

「車の方が便利だし、みんな車ばかりだもんね」

運転手

「そうですね。」

高校生の通学も今は親の送り迎えが多くて、お年寄りも車に乗せてくれる人があれば、乗せてもらって出かけますからね」

運転手さんもお客さんが少ないことを寂しく思っていた。

すると、おばさんがこんな事を言った。

おばさん

「そうやってバスに乗らないと、バスはなくなっちゃうわね」

ぼくはハツとした。

ハーバス「そうか、みんなが乗らないと、ハーバスはなくなっちゃうんだ！」

「バスがなくなったら・・・」

健太くんたちはどうやって小学校に通うんだろう」

「大桑のおばあちゃんたち、病院に行けなくてきつと困るよ」

「車いすのおじいちゃんは？」

「高校生のお姉ちゃんたちだって、バスがなくなれば、家の人が毎日乗せて行くことになるのかな・・・」

それとも、行きたい高校に行けなくなるのかな・・・」

ハーバスはバスを利用してきている人たちの顔を思い浮かべて悲しくなった。

「どうすればいい？ どうすればいい？」

ハーバスは悩んだ。そして考えた。

ハーバス

「そうだ！もつとたくさんの人が乗ればいいんだ。」

「不便なところはみんな考えて、

どこを走るか、どこに停まるか、何時に走るか、

みんなで利用しやすくなるように話し合ったらどうか」

ハーバスはみんなの楽しそうな顔をもう一度思い浮かべた。

便利なバスになって、たくさんのお客さんの役に立てると思うと、ワクワクした。

ハーバス 「みんな！ぼくに乗ってよ！」

「君たちが乗ってきてくれるのを、待ってるよ」

おしまい